水戸学と幕末武士層

——横井小楠による受容と批判をめぐって——

北　野　雄　士

The Mito Ideology and the Samurai Class in the Late Tokugawa Period : On its Acceptance and Criticism by Yokoi Shōnan

KITANO Yuji

Abstract

The Mito Ideology became the theoretical ground of "Revere the Emperor, Expel the Barbarian Movement" in the late Tokugawa Period.

The samurai class at that time was influenced by the political reforms of the Mito domain carried out by Tokugawa Nariaki, the ninth Mito Lord (daimyo), and by the late Mito Ideology of Aizawa Seishisai and Fujita Tōko.

Minamoto Ryōen classified the acceptance of the Mito Ideology by the samurai class of those days into three types. He cited Yokoi Shōnan, a samurai of the Higo domain, as the model of its third type : the type, which accepted its royal statesmanship of economizing and the principle of basing a country's economy on agriculture, but after recognizing its limitations changed into the view of mercantilism and the opening of Japan to the world.

According to Minamoto, Yokoi was in his younger age influenced by the late Mito Ideology, especially its policy of economizing and regarding agriculture as important, and later by its view of the elimination of foreigners. However since 1855 he began to vigorously criticize the political activities of Tokugawa Nariaki and the late Mito Ideology.

However we still cannot clearly explain the influence of the Mito Ideology on Yokoi, because we do not fully understand its influence especially in his younger age. Therefore, in this paper I have tried to analyze its influence throughout his life.

As a result, it proved that Yokoi's radical standpoint of royal statesmanship of benevolence in his younger age had been even in those days different from that of the late Mito Ideology, which had a cautious sentiment toward the people, though it formally adopted the royal statesmanship, and that on the other hand, the samurai in the Mito Domain had been important to Yokoi as his political allies untill 1855.

平成20年３月25日　原稿受理

大阪産業大学　人間環境学部

Keywords：the Mito Ideology, the Samurai Class in the Late Tokugawa Period, Yokoi Shōnan
水戸学，幕末武士層，横井小楠

はじめに―「後期水戸学と小楠」という問題について

水戸学は江戸時代のナショナリズムの一源泉であり，幕末の武士層に受容されて尊王攘夷運動の理論的根拠になった。その当時の呼称としては，「水戸学」の他に「水府の学」や「天保学」などがある。

明治維新後，水戸学は明治政府の国家神道政策に影響を与え[1)]，第二次大戦後においても「国体」など水戸学に由来する言葉が使われることがあることから分かるように，その影響力は今日に及んでいる。

水戸学は，研究者によって前期水戸学と後期水戸学に区分されることがある[2)]。その場合，前期水戸学は，明暦 3 年（1657年）史局（後に彰考館と命名される）を設けて『大日本史』の編纂を始めた第 2 代水戸藩主徳川光圀や光圀を補佐した安積澹泊ら史館員の学風を，後期水戸学は，文化 4 年（1807年）に彰考館総裁になった藤田幽谷や，幽谷の影響を受けて藩政改革，幕政改革を目指した会沢正志斎，藤田東湖ら改革派水戸藩士の学風を指している。本稿もこの区分に従う。

幕末の武士は，正志斎や東湖の著述，あるいは彼らが擁立した第 9 代水戸藩主徳川斉昭による藩政改革の実践から大きな影響を受けた。後期水戸学は流行の学問となり，吉田松陰，久坂玄瑞，宮部鼎蔵ら各藩の武士が水戸を訪れ，正志斎ら水戸藩士と交流した[3)]。また東湖は江戸で，西郷隆盛，橋本左内ら他藩の藩士と交わり彼らを感化した。後期水戸学に触れた武士の中から，所属する藩で改革運動を始める者が登場し，後には討幕活動に身を投じる者も現れた。

水戸学の研究は戦前から行われ，その結果，江戸時代の間にその思想が変化したこと，後期水戸学が多様な思想的構成要素の複合体であること，後期水戸学が明治維新や明治政府の国家神道政策に大きな影響を与えたことなどが分かってきた。

今，後期水戸学に限定して，これまでの研究成果に私見を交えてその要素を，（1）国

1）子安宣邦『国家と祭祀　国家神道の現在』，青土社，2005年参照。
2）尾藤正英「水戸学の特質」（今井宇三郎・瀬谷義彦・尾藤正英校注『水戸学』日本思想大系53所収），岩波書店，1973年，562-564頁。
3）鈴木暎一「水戸学の影響」（水戸市史編纂委員会『水戸市史　中巻（三）』所収），1984年，974-985頁。伊東多三郎「水戸藩の学風の伝統」，（同書所収），1984年，912-913頁。

家秩序論，（２）対外・国内政策論，（３）政治的実践論の３つに区分して整理すれば次のようになる。ただし，後期水戸学者の間には，力点の置き方や神道に傾斜している度合いなど様々な相違が存在する。また要素の間にも深い関連があることは言うまでもない。

（１）国家秩序論

国体論，尊王論，名分論

（２）対外・国内政策論

国際情勢論，攘夷論，富国論，強兵論，神道儀礼による国家統合論

（３）政治的実践論

学問事業一致論，治教一致論，文武一致論

後期水戸学は，欧米列強の艦船が日本近海に出没する状況の中で，欧米に対して日本を防衛するという国防の観点から，幕府による藩の弱体化政策，幕府の宗教政策，農業・商業政策を論じるとともに，日本を守るための精神的支柱として，皇統が一系であることに日本の国家としての独自性，優位性を見出す国体論を展開した。そして，まず水戸藩でその主張を実行した上で，改革の方法論として，学問事業一致論，治教一致論，文武一致論などを唱えた。

後期水戸学が，世界の中心に日本を位置づけ，尊王攘夷という具体的な政治目標を示し，実際に藩政改革をやって見せたことは，同時代の武士層に大きな衝撃を与えた。そして水戸学が警告した通り，ペリーがアメリカの艦隊を率いて日本に来航すると，水戸藩主とその改革派家臣の声望は一気に高まった。

幕末の武士は，前述した後期水戸学の多様な要素の中から，自らの思想や気質，個人的利害，社会的立場に適合するものを，意識的，無意識的に選び取り，選択した要素を実現するための政治行動に身を投じたり，自らの行動を正当化したりした。

武士の政治行動に影響を与えた思想は，後期水戸学だけではない。彼らは，儒教の経典やその注釈書，中国の史書を通じて本来の儒教を学ぶと共に，闇斎学や国学などからも影響を受けた。

また，特定の藩に所属し，その中で職務や身分を持っていることによる社会的拘束，さらには出世欲や不満などの個人的利害も武士の行動を規定していたと考えられる。

さて，幕末武士層による後期水戸学の受容については，水戸藩の士民や各藩の志士など，個々の事例についてはかなりの研究があるが，その類型化を図ったものとしては，管見する限りでは，源了圓氏の論文「明治維新と実学思想」[4]があるだけである。

４）源了圓「明治維新と実学思想」（坂田吉雄編『明治維新史の問題点』所収），未来社，1962年，特に57-58，69-83頁。

この論文によれば，後期水戸学の受容のあり方は次の 3 タイプに分けられる。

（1）後期水戸学のうち特に攘夷論の部分に共鳴したが，兵学研究を進めた結果開国論に転じた佐久間象山（松代藩士）のようなタイプ

（2）後期水戸学のうち特に尊王論を受け入れたが，政治過程の中で，それが尊王敬幕という限界を持つことを知り，その名分論を徹底して尊王討幕へと転換した真木保臣（真木和泉守，久留米藩神官）のようなタイプ

（3）最初に，王道（仁政）思想に基づいて節倹と抑商勧農を説く後期水戸学の影響を受けたが，王道思想を徹底化すれば攘夷は不可であることを認識し，攘夷論を捨て開国論に転換した横井小楠（肥後藩士）のようなタイプ

源了圓によれば，以上の類型は当時の武士や知識人の思想的中核が何であるかによって行われたものであり，1 人の思想家が攘夷論，尊王論，王道論のいずれも主張していることは多々あった。

この類型は，後期水戸学の受容を考える上で大きな示唆を与えるが，2 つの問題点がある。それはまず第 1 に，後期水戸学の影響を受けた武士や知識人が行きついた政治路線として，開国/鎖国，敬幕/討幕の 2 つの軸が混ぜて用いられていることである。すなわち，（1）と（3）は前者の軸の開国，（2）は後者の軸の討幕が政治路線の帰結とされている。

後期水戸学と明治維新という問題を立てる場合，明治維新が多面的な要素を持つために，明治維新のどの要素に与えた後期水戸学の影響を考察するかによって，テーマはより細分化することになる。厳密な議論をするにはもっとテーマを絞らなければならない。

次に，第 2 の問題点は，（3）の類型の典型として取り上げられている横井小楠と後期水戸学と関係は，実はまだよく分かっていないことである。

これまで40代半ば以降の小楠と後期水戸学の関係に関する研究はなされてきた[5)]。その結果，安政 2 年（1858年）小楠が47歳の時，徳川斉昭が密かにアメリカとの和議を唱えていたことを知って以来，後期水戸学に対して全面的とも言ってよい批判を展開したこと，そして，世界地理書である『海国図志』を読んで攘夷論を捨てて開国論に転換し，節倹を重んじる後期水戸学の富国論とは異なった交易重視の富国論を主張するようになったことが明らかになった。

また，小楠が34歳の年に書いたと推定されている初期の論策『時務策』を見ると，確か

5）後期水戸学と小楠の関係を論じたこれまでの研究論文としては，拙稿「横井小楠による水戸学批判と蕃山講読―誠意の工夫論を巡って―」，『横井小楠研究年報』第 2 号，2004年 9 月，及びその論文の注 6 で挙げた諸論文がある。

に当時小楠が水戸藩で行われた藩政改革や節倹を重んじる政策から影響を受けていることが分かる。

しかし，『時務策』を除いては，20代末から30代にかけての小楠と後期水戸学の関係については，まだ十分には明らかにされていないのが現状である[6)]。

近年，野口宗親氏を中心とする小楠の漢詩文研究会によって初期小楠の漢詩文の解読が進められている。その成果を読むと，20代末から30代前半にかけて，小楠がすでに『大日本史』や水戸藩士に対して批判的な目を持っていたことが分かる。

そこで，本稿では，野口氏の研究を参照しつつ，小楠が20代末以来生涯に渡ってどのように後期水戸学を受容し，どのように批判するようになったかを考察し，第2の問題点を解明するための第一歩としたい。第1の問題点の検討は稿を改めて行うことにする。

まず，第一章で，後期水戸学の特質と後期水戸学を構成する思想的要素を概説した上で，第二章で20代から30代にかけての小楠と後期水戸学の関係を，第三章で40代以降の小楠と後期水戸学との関係を，小楠の経世論の発展と関連付けながら考察しよう。

第1章　後期水戸学の特質と思想的構成要素

本章では，後期水戸学と小楠の関係を考察するのに必要な限りで，第1節で後期水戸学の特質を，第2節で後期水戸学を構成する思想的要素を，従来の研究成果に従って概説したい。

第1節　後期水戸学の特質

まず，水戸学の歴史を略説し，次に前期水戸学と後期水戸学の連続性と非連続性を考察することにより，後期水戸学の特質を明らかにしよう。

水戸学が生まれたのは，水戸藩の第2代藩主徳川光圀が，『春秋左氏伝』，『史記』など中国の歴史書を範とする日本史を構想し，明暦3年（1657年）史局（後に彰考館と命名）を設けて編纂事業を始めたことによる[7)]。光圀と，光圀によって集められた館員は，『史記』

6）20代末から30代にかけての小楠がすでに水戸学に対して批判的な眼ももっていたことについて，野口宗親氏のご教示を得た。なお鎌田浩は小楠が嘉永4年（1851年）頃から水戸学に対して違和感をもちはじめたふしがあると次の論文で指摘している。「横井小楠と長岡監物」（同著者『熊本藩の法と政治』所収），創文社，1998年，556頁。

7）水戸学の歴史については，主に以下の文献を参照した。前掲尾藤正英「水戸学の特質」，鈴木暎一『水戸藩学問・教育史の研究』，吉川弘文館，1987年，水戸市史編纂委員会『水戸市史中巻』（一），（二），（三），（四），1991年，1984年，1984年，1982年。

の紀伝体に習い，歴代天皇や将軍など日本史上の重要人物の伝記を編述し，儒教道徳の立場から各人物の事績を是非して，後世の人々に教訓を与えようとした。

光圀の死後，編纂事業は停滞したが，天明6年（1786年），立原翠軒が彰考館総裁に任命されると活発になった。寛政元年（1789年）翠軒は，「志」（制度文物の歴史）や「表」（系譜，年表，官職表など）の編纂を後回しにして，すでに稿が出来上がっている紀伝を速やかに校訂して公刊することを提案した。

翠軒の門人で館員の小宮山楓軒は，直ちにこの提案に反論して，志，表編纂の必要性を唱えた[8)]。また，同じく翠軒の門人で館員の藤田幽谷は，寛政9年（1797年）『大日本史』という題名に関する書状を同僚の館員に送り，勅命でなく私（わたくし）に作った国史に「日本」と命名するのはどうか，などという理由で，題名を『史稿』に改めるべきだと述べた。さらに，享和3年（1803年）館員の高橋坦室は，易姓革命を是認する中国はともかく，革命がなく君臣の分が定まっている日本で，臣下が天皇の先祖の統治を論評するのはよろしくないと，紀伝につけられた論賛（人物に対する道徳的論評）を削除すべきだと主張した。

こうした「三大議」は，彰考館内部に深刻な対立を生み出した。結局翠軒は藩主の信任を失って総裁を辞職し，幽谷派が勝利した。

翠軒が失脚すると，藤田幽谷と高橋坦室が総裁になり，論賛は削除され，志，表の編纂が進められた。題名は，朝廷が『大日本史』でよいとしたのでそのままになった。

幽谷は，古代より天位を奸す者がなく，皇統が一姓であることに日本の独自性を求める国体論[9)]を主張し，天皇の権威を絶対化した。また，西洋諸国に対する攘夷とともに，富国強兵のための藩政改革や幕政改革を唱えて現実の政治に積極的に関わろうとした。

幽谷の弟子の中から，会沢正志斎や藤田東湖ら改革派の藩士が現われ，文政12年（1829年）子どものなかった第8代水戸藩主斉脩（なりのぶ）の後に弟の斉昭を第9代藩主に押し立てて，富国強兵を目指す藩政改革を断行した。

斉昭は藩主になると，正志斎や東湖らを登用して，節倹政策，領内総検地，巨砲鋳造，神仏分離などを矢継ぎ早に実行するとともに，藩校（弘道館）や郷校を建設して士民に水戸学の理念を教え，また著述を通じて全国の武士に宣伝した。

しかし，弘化元年（1844年）斉昭は，幕府に水戸藩の急激な改革をとがめられて致仕謹慎を命じられた。その後，嘉永6年（1853年）ペリーが来航すると，斉昭は幕府の海防参

8）松本三之介「近世における歴史叙述とその思想」（松本三之介，小倉芳彦校注『近世史論集』日本思想大系48所収），岩波書店，1974年。野口武彦『江戸の歴史家—歴史という名の毒』，筑摩書房，1979年，254-264頁。

9）藤田幽谷「正名論」（前掲『水戸学』所収），11頁。藤田幽谷「丁巳封事」（同書所収），34-42頁。

与となって復活したが，安政５年（1858年）には，井伊大老の違勅調印を責めようと江戸城に不時登城したことを理由に，「急度慎」を命じられ，藩邸に幽閉させられた。

同年，朝廷から水戸藩に対して，幕府の違勅調印をなじり，その問題で幕府に抗議した藩主や前藩主に対する処分に疑問を呈した，いわゆる戊午の密勅が下った[10]。この密勅には列藩にも伝達せよという副書が付けられていたので，水戸藩の改革派は，直ちに他藩にも回達すべきだという激派と，これを軽挙と見なす鎮派に分裂して抗争を始めた。この抗争に，門閥派が加わって水戸藩は争乱状態になった。激派は，万延元年（1860年）３月桜田門外で大老を暗殺し，元治元年（1864年）には，筑波山に挙兵していわゆる天狗党の乱を起こした。斉昭は，争乱を解決できず，謹慎中のまま万延元年８月に没した。

さて，前期水戸学と後期水戸学の間で連続するものは何であり，連続しないものは何であろうか。

まず，連続するものは，第１に徳川将軍家を宗家としながら朝廷を尊崇し，朝廷に接近しようとする傾向であり，第２に皇統の持続性を重視し，そこに日本と中国の違いを見出す考え方である。

次に，連続しないものは何か。これについては，尾藤正英氏と野口武彦氏の所説が明快である。

尾藤氏によれば[11]，前期水戸学が朱子学の影響を強く受け，儒教道徳の普遍性を信じて紀伝を書いているのに対して，後期水戸学は，徂徠学や国学の影響を受け，古代から続いている日本社会に固有な伝統に主要な関心を向け，皇統が一貫して存続し天皇の位が奸されることがなかったことに，日本の民族的個性と優越性を見出している。

また野口氏によれば[12]，光圀の時代には，歴史叙述のうちに歴史を貫徹する「大義の正道」を示そうとする朱子学的道徳主義と，皇統の連綿たる持続性を重んじる思想とが，皇統の持続性に朱子学の天理の現れを見る論理によって接合されていた。しかし幽谷に至って，道徳理法ではなく，皇室の意向がすべての議論に優先するようになり，「皇統一姓」の権威が絶対化されるようになった。さらに，正志斎や東湖の時代になると，儒教には副次的な役割が与えられるだけになり，「神州」の固有するところである国体が国学の影響もあって，唯一無二の当為とされ，社会秩序と民族的独立の源と見なされた。

以上をまとめれば，後期水戸学は，前期水戸学から，朝廷を尊崇し，朝廷に接近しよう

10）安政５年（1858）の勅諚降下問題については，前掲鈴木暎一「水戸藩尊攘派の思想と行動―激・鎮両派の対立をめぐって」を参照した。
11）前掲尾藤正英「水戸学の特質」，563-565頁。
12）前掲野口武彦『江戸の歴史家―歴史という名の毒』，128-129，261-262頁。

とする態度を引き継ぐ一方で，国体論という形で皇統の持続性を絶対的な規範に高め，日本の個性と優越性の根拠にしたということができる。

第 2 節　後期水戸学の思想的構成要素

前述したように後期水戸学の思想的要素は，（1）国家秩序論，（2）対外･国内政策論，（3）政治的実践論に分類される。西欧列強の艦船が日本近海に出現する状況の中で形成された後期水戸学は，国防という見地から，日本という国家の独自性，優越性を根拠付けるとともに，従来の対外・国内政策を見直して新たな政策を打ち出さなければならなかった。さらに，新政策の実践に武士たちを動機付けるために，学問事業の一致，治教の一致，文武の一致などを説いた。

まず，後期水戸学の国家秩序論の根本は国体論[13]である。前述したように，国体論とは，日本の国家体制の独自性，優越性を，中国のように王朝が交替せず，皇統が一系であることに求める考え方である。

この国体論に基づいて，尊王論と名分論が展開される。後期水戸学の尊王論と名分論の出発点は，幽谷の『正名論』（寛政 3 年，1791年）である。

幽谷はこの論文で「…幕府，皇室を尊べば，すなはち諸侯，幕府を崇び，諸侯，幕府を崇べば，すなはち卿･大夫，諸侯を敬す。夫れ然る後に上下相保ち，万邦協和す」[14]と述べ，皇室―幕府―諸侯（大名）―卿・大夫（大名の家臣）の身分的秩序の枠内における，直接の主君に対する忠誠が強調されている。

このことを理解するには，藩主斉昭が天保 4 年（1863年）初めて水戸に就封したときに家中に諭告した『告志篇』[15]が分かりやすい。斉昭はその中で，現在自分が仕えている主君や父親を飛び越えて，皇室や幕府に忠誠を尽すなどという，身分をわきまえぬ振舞をしてはならぬと述べている。

後期水戸学の尊王は，将軍が行う尊王であり，大名やその家臣は直接の主君に忠であればよく，身分を越えて皇室に忠義を立てようとしてはならないというものであり，直接の主君に対する家臣の忠誠義務を意味する名分論を前提としていた。

次に，後期水戸学の対外・国内政策論は，国際情勢論，攘夷論，富国論，強兵論，神道による国家統合論からなる。

13）国体論を支える根本思想として，祭政一致論と神儒一致論がある。会沢正志斎『新論』（前掲『水戸学』所収），53,64-65頁。

14）藤田幽谷「正名論」（前掲『水戸学』所収），13頁。

15）徳川斉昭「告志篇」（前掲『水戸学』所収），212頁。

後期水戸学は，西洋諸国が日本近海へ進出してきたことに対する危機感から生まれたものであるから，国際情勢，特に西洋諸国の動静には関心が深かった。藩内から世界地理を研究する学者も現れ，斉昭も家臣に洋学をやらせた。

正志斎の『新論』（文政８年，1825年）も，「形勢」，「虜情」篇の中で[16]世界情勢，西洋諸国の動向を述べているが，特にキリスト教が日本の民衆に広まることを強く警戒している。

正志斎は，欧米諸国の侵略とキリスト教の脅威に対して攘夷を主張し，幕府が出した異国船打払令を支持して攘夷に邁進すべきだと述べている。また，藩校弘道館の綱領である『弘道館記』でも「尊王攘夷」が宣言されている[17]。

富国論は農民の生活を維持し，商人の力を抑制しようとする農本主義的なものであり，奢侈を禁止し倹約を奨励している[18]。

また，強兵論は幕府を強くするだけでなく，各藩の軍事力をも強化すべきだとする「本末共強」[19]の国防を主張しており，暗に参勤交代など幕府の伝統的政策である「本強末弱」の政策を批判するものになっている。

さらに，後期水戸学はキリスト教によって人心が統一した西洋諸国に対抗するため，神道の祭祀，特に天皇が行う大嘗祭を再び全国的な規模で行うことを提案し，神道儀礼によって日本の民衆を教化し，民心を統一することを説いている[20]。

以上の国際情勢論，攘夷論，富国論，強兵論，神道による国家統合論は，何れも日本の国防という見地から提唱されたものである。

最後に，後期水戸学の政治的実践論[21]に触れておこう。それは学問事業一致論，治教一致論，文武一致論などからなる。水戸藩が藩校や郷校を設立して，このような理念を実現しようとしたことは，幕末武士層に大きな影響を与えた。

学問事業の一致[22]とは，本来学問を修めた者が治政の事業を行わなければならないと

16）前掲『新論』（前掲『水戸学』所収），88-106頁。
17）同書，101，132-133頁。徳川斉昭「弘道館記」（前掲『水戸学』所収），230頁。
18）藤田幽谷「丁巳封事」（前掲『水戸学』所収），34-42頁。
19）前掲『新論』（前掲『水戸学』所収），78-79頁。
20）同書，139，152-154頁。
21）藤田東湖の「正気歌」は，幕末の武士に愛唱され，生死を顧みず国事に奔走する「革命のパトス」を彼らに吹き込んだ。藤田東湖「和文天祥正気歌並序」（高須芳次郎編『藤田東湖全集』第３巻所収，章華社，1935年），３-50頁。なお上山春平「明治維新史の革命性」（『上山春平著作集』第３巻所収），法蔵館，1995年，30-33頁参照。
22）藤田東湖『弘道館記述義』（前掲『水戸学』所収），328-330頁。

いう要請である。治教一致[23]とは，政治と教育を一致させるというものである。例えば，斉昭は弘道館教授を小姓頭に任命して政治に対する意見を述べさせ，自ら弘道館に出向いて文武の進み具合を試験した。文武一致[24]とは，治政や禍乱の鎮定という大いなることであれ，読書や剣撃という小なることであれ，文と武をバランスよく実践して国力を高めることである。

後期水戸学は，以上のように国家秩序論，対外・国内政策論，政治的実践論に大別される様々な思想的要素から構成されているが，その構成要素には，国体論，尊王論，名分論のように日本の特殊性を強調する要素が多く，農本主義的な傾向や明治政府の国家神道政策を想起させる傾向がある。しかし，その一方でキリスト教によって精神的に統合された西洋の統一国家に対する防衛の見地から提案されているため，世界情勢への目配り，富国論，「本末共強」の国防論，民心の統一論など普遍的進歩的な部分もある。

また，政治的実践論は，中国の儒教思想，特に士大夫による政治という理念の影響が色濃い。

要するに，後期水戸学は，日本の特殊性を強調する求心的要素と，西洋的な意味での普遍と中国的な意味での普遍に向かう遠心的要素とが，緊張関係を持ちつつ国防の見地から統合された思想と言えよう。

後期水戸学に影響された幕末の武士は，その様々な要素の中から，自らの思想や気質，個人的利害，社会的立場に適合するものを選択して行動した，

その１人である横井小楠は，特に水戸藩における藩政改革の実践，富国論，攘夷論に大きな影響を受けた。次章では，20代から30代にかけての小楠と後期水戸学の関係を論じることにしよう。

第２章　20代，30代の小楠と後期水戸学

横井小楠が，水戸学に触れた正確な時期は不明だが，少なくとも天保10年（1839年）31歳の時までには，『大日本史』[25]を読み，彰考館総裁をしていた青山拙斎の『皇朝史略』[26]を読んでいたことが分かっている。小楠は，江戸に遊学したので，藤田東湖ら水戸藩士に直接接触し，藩政改革を進めつつある水戸藩の雰囲気を肌で知ることができた。

遊学中の酒失事件により，天保10年（1840年）熊本に帰国すると，小楠は朱子学の研究

23）同書，337-338頁。
24）同書，326-328頁。
25）山崎正董『横井小楠　遺稿篇』，明治書院，1938年，858頁。
26）同書，794頁。

に打ち込んだ。その後肥後藩家老長岡監物ら肥後藩士と読書会を催した。このグループは藩政改革を目指す政治集団となり，保守派の藩士から実学党と呼ばれた[27]。

この時期，小楠は節倹の政など水戸藩の改革や士風を高く評価しており，水戸学の影響下にあったと考えられる。しかし，その一方で小楠は『大日本史』の人物評価を批判し，水戸藩士に見られる悲憤慷慨の害を指摘しており[28]，水戸学や水戸藩に対して醒めた目ももっていた。次章で述べるように，小楠は安政２年（1855年）47歳の頃より，斉昭や水戸学を論難するようになるが，その萌芽はすでに30代前半にあったのである。

本章では，小楠が20代後半から30代前半にかけて，どのように水戸学を受容したかをこの時期の漢詩文や政策論に基づいて考察することにしたい。

横井小楠は，文化６年（1809年）肥後藩士の次男として生まれ，天保４年（1833年）藩校時習館の最上級クラスの居寮生となり，天保８年（1837年）には，居寮長に選ばれた[29]。

小楠は，それまで中国の史書や儒教の経典や注釈書など学んでいたが，特に史学を好んだ。読んだ史書の中には，『大日本史』も含まれている。また，居寮長をしていた頃，前述の『皇朝史略』も読んでいる。

当時水戸藩では，文政12年（1829年）に藩主となった徳川斉昭が，藤田東湖や会沢正志斎ら改革派藩士を登用して，藩政改革を推進していた。水戸藩における目覚しい改革の情報は肥後藩にも伝わっていた。

天保10年（1839年）３月小楠は江戸遊学を命じられた。江戸に向かう途中で近江の義仲寺に立ち寄った際，小楠は漢詩[30]を作り，源義仲が上皇の居所を襲撃したという理由で『大日本史』が源義仲伝を「叛臣伝」に入れていることを批判し，義仲の質朴な忠誠心を賞賛している。小楠が『大日本史』の歴史記述に飽き足りなかったことは注目される。

小楠は４月に江戸に到着すると，早速５月には東湖に面会を求めている[31]。江戸遊学中の手記の中で小楠は，東湖の偉丈夫振りと事実に即して冷静に物事を考えようと心がけている様子に感銘を受け，当代の諸藩の中でも藤田ほどの男は少ないだろうと述べている。

天保10年の間に小楠は少なくとも３回東湖に会っている。５月の某日，12月２日，12月25日である。最初の２回の話題は，水戸藩および肥後藩における農政，水戸藩における知

27）山崎正董『横井小楠　伝記篇』，明治書院，1938年，101-104頁。松浦玲『横井小楠〈増補版〉儒学的正義とは何か』，朝日新聞社（朝日選書），2000年，42，281-283頁。
28）前掲『横井小楠　遺稿篇』，864頁。
29）前掲『横井小楠　伝記篇』，35-36頁。
30）前掲『横井小楠　遺稿篇』，858-859頁。野口宗親編『横井小楠「東游小稿」訳注』，2001年，45-50頁。
31）前掲『横井小楠　遺稿篇』，799-800，817-818頁。

行制度の改革など実務的なことであった。

12月25日は，斉昭の就藩に従って水戸に帰らなければならない東湖が催した忘年会の日であった。宴席には小楠だけでなく列藩の友人も招かれていた。小楠はこの席で自作の漢詩を披露しているが[32]，その中で悲憤慷慨は国家にとって益するところがないと，暗に水戸藩士を戒め，君主をいたずらに咎める者にはまごころがない，まごころを持って君を愛するには道があって，おもむろに君の心をうつようにするのが家臣の勤めだろうと詠っている。

小楠はこの忘年会の１ヶ月前，兄の横井左平太に手紙[33]を出し，翌年の２月から10月にかけて，水戸，仙台，会津，米沢を遊歴したいと書いている。しかし，翌年の天保11年２月（1840年）小楠は，過酒のために藩外の者と問題を起こしたという廉で帰国を命じられ，東北遊歴の機会を失った[34]。

帰国後70日の逼塞を命じられた小楠は門を閉じて朱子学の研究に専念した。しかし天保12年（1841年）になると肥後藩家老長岡監物，藩士の下津休也，荻昌國，元田東野（元田永孚）らと『近思録』の会読を始めている。このグループは，経学の学習会に止まらず，藩政改革までも主張する政治集団に成長した。

東湖を始めとする水戸藩士が斉昭に忠誠を誓い，斉昭を藩主に押し立てて，思い切った藩政改革を断行したことは，小楠や監物ら肥後藩士に大きな感銘を与え，藩政の改革運動に対する大きな刺激になった。実学党のメンバーにとって水戸藩はまさに藩政改革の手本だったのである。

小楠は，天保13年（1842年）[35]に肥後藩の財政制度や町方制度を批判し，その改革案を示した草稿を執筆している。

後に徳富蘇峰によって「時務策」と題されたこの草稿には，水戸藩の藩政改革や士風が小楠に与えた影響が読み取れる。

まず，小楠は水戸藩が当時専売制を廃止し節倹を徹底させ商人を抑える政策を取ったことを高く評価し，肥後藩でもそのような政策を実施すべきだと主張する[36]。具体的には，

32）同書，864頁。

33）前掲『横井小楠　伝記篇』，63-66頁。

34）同書，67-71頁。

35）『時務策』の成立時期については諸説あるが，堤克彦，野口宗親氏に従って天保13年とした。堤克彦「肥後藩士横井平四郎の『時務策』著述の時期について—『天保13年秋説』の提唱の背景—」，『熊本県高等学校地歴・公民科研究会　研究紀要』第34号，2004年，野口宗親「横井小楠の『感懐』詩について」，『熊本大学教育学部紀要』第55号，人文科学，2006年，特に217頁の注15参照。

36）前掲『横井小楠　遺稿篇』，65-79頁。「時務策」の稿本には，『遺稿篇』編者の山崎正董↗

節倹の強制，民衆に金を貸し付け利子を取る部局の廃止，町奉行制度による商人の統制，熊本の市中人口の削減などが提案されている。ここには後期水戸学の「勧農抑商」的な富国論の影響が見て取れる。

次に，士風の正しい藩として，上杉鷹山，保科正之，徳川光圀が藩主をしていた米沢藩，会津藩，水戸藩が挙げられている[37]。このうち水戸藩については「水戸は西山公（光圀のこと―引用者注）出させられ　王朝を尊び忠孝を重ずるの道を以て，国本を立てられたる故に其士人賢不肖となく百年の今日に至る迄，士風殊の外に気概盛なる国俗なり」[38]と述べられており，光圀に対する小楠の崇敬の念が読み取れる。当時小楠は当代の徳川斉昭も名君だと考えていたようである[39]。

しかし，小楠の視線は肥後藩の貨殖政策に苦しむ一般民衆と同じところにあり，愚民観を持ち民衆の決起を恐れた後期水戸学の視線[40]とはすでに異なっていた。小楠は中国の「夏殷周三代の世」を理想とし，「聖人治国の道は国天下の士民を富すの道にて，聚斂の政とは昼夜明暗の如に異なる事なり」[41]と述べて，肥後藩の貨殖の政を「苛政は虎よりも猛なり」という言葉を引いて手厳しく批難している。

当時小楠は『孟子』の影響を強く受けており，『時務策』の中で孟子の「なんぞ其の本へ返らざる」という言葉を引用し，「官府を利する心を捨て一国の奢美を抑え士民共に立ち行く道」をつけるべきだ[42]と説いている。

天保14年（1843年）秋の台風・高潮によって肥後藩内の田畑や家屋が大損害を受けたとき，小楠は，その被害と民の苦しみを「感懐」[43]と題する漢詩に詠み，その際にも『孟子』

↘が発見した稿本と，徳富蘇峰が読んで「時務策」と題した稿本の二つがあることが分かっている。徳永洋「横井小楠『時務策』考」（熊本近代史研究会『近代の黎明と展開―熊本を中心に―』所収），熊本出版文化会館，2000年，24-32頁。野口氏は，２つの稿本を対照して徳富蘇峰題の稿本に小楠が加筆したものが，山崎正董発見の稿本であると推定している。前掲「横井小楠の『感懐』詩について」の注15を参照のこと。

37）士風に関する小楠の見解は，徳富蘇峰題の稿本中の「御家中の風俗を正す事」に基づく。前掲「横井小楠『時務策』考」，29-30頁。

38）同書，30頁。

39）前掲『横井小楠　伝記篇』，66頁。

40）遠山茂樹「水戸学の性格」（中村孝也編『生活と思想』所収），小学館，1944年，182-191頁。

41）前掲「横井小楠『時務策』考」，27～28頁。

42）前掲『横井小楠　遺稿篇』，69頁。

43）同書，874頁。「感懐」詩中の「斯民」や「年を罪する無かれ」が『孟子』に由来することは，前掲野口宗親「横井小楠の『感懐』詩について」が，226-225頁で指摘している。野口宗親「横井小楠の『沼山閑居雑詩』について」熊本大学教育学部紀要，人文科学第56号，2007年も参照した。

に由来する「斯民(しみん)」[44]（「この民」と親しみを込めて民衆を呼ぶ言い方）や「罪年」[45]（年の巡り合わせのせいにする）という言葉を使って，藩当局は「年の巡り合わせのせいにしないで，斯(こ)の民を救っていただきたい」と訴えている。

『孟子』のなかで「斯民」は，君主が悪政を行って民衆（「斯民」）を飢え死にさせてはならないという文脈で，「罪年」は，王が凶作を年のせいにしたりすることがなければ天下の民は王のもとに集まってくるという文脈で使われている。この時期小楠が孟子の王道思想に共鳴していたことが分かる。

さて小楠が，後期水戸学から受けたことが確実な影響としては他に攘夷論がある。この影響が文献上明らかになるのは，嘉永 3 年から 6 年にかけての時期（1850–1853年），小楠の40代前半である。攘夷論の影響は次章で扱う時期に見られるが，ここで触れておこう。

小楠は，自身の私塾に来学したことがある越前藩士三寺三作宛書簡（嘉永 3 年，1850年）の中で，「夫我　神州は　百王一代三千年来天地之間に独立し世界万国に比類無之事に候へば，譬(たとへ)人民は皆死果，土地は総て盡き果て候ても決して醜虜と和を致し候道理無之候」[46]と述べ，後期水戸学の文献で使われていた言葉や表現を用いながら，攘夷論を唱えている。

嘉永 6 年（1853年）6 月ペリーがアメリカの艦隊を率いて浦賀に来航すると，小楠は東湖に手紙[47]を出した。その内容は，水戸学が日本史の編纂を通じて，日本の「国体」の歴史を明らかにし，早くから欧米諸国の脅威を警告していたことに敬意を表し，斉昭が全国の武士の思いに答えて攘夷運動の先頭に立つことを期待し，肥後藩の同志と共に協力したいというものである。

小楠はそれ以前から水戸藩の内部抗争を見かねて東湖に党争の禍を警告していた[48]が，日本の独立の危機を早くから指摘してきた後期水戸学それ自体は高く評価していたのである。

しかし，小楠はその東湖宛の書状では勇ましい表現を使っているが，同年の10月下旬に書かれたと推定されている「夷慮応接大意」[49]という文章の中では，日本の国法を踏みにじったアメリカを批難し，アメリカが態度を改めなければ戦争も止むを得ないというように，異民族に対する嫌悪感というよりも，儒教に基づく国家間の「礼」あるいは正義の立場でアメリカに対しようとしている。

44）金谷治『孟子』（新訂中国古典選第 5 巻），朝日新聞社，1966年，11-13頁
45）同書，10-11頁。
46）前掲『横井小楠　遺稿篇』，135～136頁。
47）同書，204-205頁。
48）同書，143-144，148-149頁。
49）同書，11-14頁。

小楠は2年後の安政2年（1855年）漢訳の世界地理書『海国図志』を集中的に読んで，西洋文明の力を知り，欧米諸国を敵視する攘夷思想を捨て，積極的な開国論に転じた。

攘夷論から開国論への転換については次章で詳しく取り上げることにして，最後に後期水戸学の国体論と尊王論が小楠に与えた影響について考察しておこう。

まず，国体論であるが，小楠は「夫我　神州は　百王一代三千年来天地之間に独立し世界万国に比類無之事に候へば」[50]と書いているように，国体論を議論の前提としていた。

他に国体に言及したものとしては江戸遊学中の漢詩「読北畠公正統記」[51]があるくらいである。これは，南朝の遺臣北畠親房の『神皇正統記』を読んだ感想を詩にしたもので，明徳3年（1392年）に南朝と北朝が講和した後の朝廷について，正統な王朝と正統でない王朝という違いはあっても皇統は一つとなり，天子という立派な名称は永久に天地を照らしていると詠っている。

次に尊王についても，小楠はそれを当然の前提にしており，『南朝史稿』で楠木正成・正行父子など後醍醐天皇の忠臣たちを描いて彼らの尊王の念を称揚している[52]。

しかし，後期水戸学の国体論や尊王論が小楠に与えた直接的影響は見られず，それらはこの時代の了解事項として議論の前提とされていたと考えられる。小楠にとっては国体を根拠づける努力よりは，日本の独立を守ることの方が重要であった。

以上，「勧農抑商」的富国論，攘夷論，国体論，尊王論について，後期水戸学が主として20代，30代の小楠に与えた影響を考察した結果，その直接的影響が明らかに認められるのは，「勧農抑商」的富国論，攘夷論であることが分かった。

次章では，小楠が40代以降その政治思想を飛躍的に発展させてゆく中で，後期水戸学をどのように批判するようになるかを見てみよう。

第3章　40代以降の小楠と後期水戸学―経世論の発展と関連付けながら

後期水戸学に対する横井小楠の批判は，安政2年（1855年）以降急に厳しさを増す[53]。小楠は，陰で幕府にアメリカとの和議を進言した斉昭やその家臣の政治行動を断罪すると

50）同書，135頁。
51）同書，862-863頁。前掲野口宗親編『横井小楠「東游小稿」訳注』，84-92頁。
52）前掲『横井小楠　遺稿篇』，679-680頁。
53）安政2年（1855年）以降小楠が行った後期水戸学批判については次の拙稿で詳論した。北野雄士「横井小楠と水戸学――『修己』，政治，日本文明観を巡って――」，『大阪産業大学論集』社会科学編，114号，2000年3月，前掲「横井小楠による水戸学批判と蕃山講読――誠意の工夫論を巡って――」。

ともに，後期水戸学それ自体の「学の曲がり」を指摘した。また同年には，世界地理書を研究したことが契機となって，攘夷論から開国論に転換している。万延元年（1860年）になると，『国是三論』を口述し，1840年代前半の「勧農抑商」的な富国論を捨て藩が領内の生産と流通の活性化を図り，領内で生産された商品を売りさばくという商業重視の富国論を提案している。

このような後期水戸学からの脱却は，直接的には，ペリー来航に対する水戸藩の対応に失望したこと，世界地理書を読んだこと，越前藩に招かれて藩の経済政策の立案・実行を指揮したことなどの政治的経験や視野の拡大に基づいているが，1840年代（小楠30代）以来の朱子学を機軸とした小楠自身の思想的発展を前提としている。

そこで本章では，第 1 節で1840年代から50年代にかけての小楠の思想的発展を概説した上で，第 2 節で安政 2 年（1855年）における後期水戸学批判と攘夷論からの脱却を，第 3 節で商業重視の富国論への転換を論じることにしたい。

第 1 節　小楠の思想的発展

小楠は天保11年（1840年）江戸遊学から帰って以来朱子学の研究に没頭した。その際，彼は肥後出身の 2 人の儒者，大塚退野(1677-1750年)，平野深淵(1705-1757年)に私淑し，2 人を学問上の先達として朱子学を学んだ[54]。

朱子は，己の修養から始めることで治国，平天下も可能になるとする，「修己」と「治人」を一体視する『大学』の思想を「修己治人」と一言で表現している[55]。退野は，「修己」の前提として，「立志」と日常義務の遂行を重視し，「修己」を，天から与えられて自己に具わっている「理」を全うすることと理解する。

退野は，自己の理を全うするという場合，他人の評価のためではなく，己が天から理を賦与されていることを心から合点してその理を成就しようとする態度が重要であると言う[56]。退野が『論語』にちなんで「為己の学」と呼んだこの思想は小楠も受け継いでいる。

次に，平野深淵は退野の弟子の 1 人であったが，引退後程伊川の『易伝』研究に専念し，それに基づいて日本の為政者とその家臣のあるべき姿を論じた。深淵によれば，万物に注がれる天の働きは，古代中国の堯舜の治世に現象し，その原則は「天にかわりて天下の民

54）小楠が退野，深淵から受けた影響については次の拙稿参照。北野雄士「大塚退野，平野深淵，横井小楠――近世熊本における『実学』の一系譜」，『大阪産業大学論集』人文科学編，107号，2002年 6 月。

55）朱子「大学章句序」（朱子『四書集注』所収）。

56）大塚退野「孚斎存稿」（『肥後文献叢書』第 4 巻所収），隆文館，1920年，648，653-655頁。

を愛しそのところを得せしめる」[57] ことである。この原則は時空を超えて妥当し日本の為政者も守らなければならない。

小楠は1840年代，退野を通じて特に「修己」の考え方を，深淵を通じて特に「治人」の原則を学びながら，友人や門人と共に朱子学を講学し，朱子学に対する理解を深めていった。

さて越前藩士の三寺三作が，嘉永２年（1849年）小楠の塾を訪れたことがきっかけとなり，小楠と越前藩士の交流が始まった。1850年代になると，越前藩における小楠の名声は高まり，越前藩は小楠に対して藩校の建設についてその是非を諮問した。これに答えたものが嘉永５年（1852年）に書かれた『学校問答書』である。

『学校問答書』[58] は，藩校の目的として為政者の「修己」と「治人」の一致を掲げている。小楠によれば，「修己」と「治人」の一致とは，為政者が己を修めることと人を治めること，すなわち為政者の自己修養が「本」になって人々に及び，「末」の個々の政治に現象していることである。「修己」と「治人」の一致を実現するには，為政者は絶えず家臣と一緒に「朋友講学」を行って，互いの非を戒め合い，その上で政治を論じ，適切な政策を発見して実行してゆかなければならない。このような朋友講学の場が小楠の理想とする学校だった。

朋友講学は，為政者の「修己」を助け，正しい政治を行わせるための方法である。このような主張がなされた背景には，小楠が30代の始めの頃肥後藩家老長岡監物を含む肥後藩士と『近思録』を講学した経験があるだろう。小楠は，早くから為政者の重要性に気づいており，次第に為政者の教育という問題が重要なテーマになっていった。『学校問答書』に至って，小楠は為政者の修己治人の意味を明らかにし，為政者が身を修める方法として朋友講学の必要性を強調したのである。

さて『学校問答書』は，理想的な朋友講学が行われた時代として「三代」[59] の時代を挙げている。「三代」は，「堯舜三代」とも呼ばれ，四書五経の１つである『書経』に描かれた，堯や舜など伝説的帝王の時代，及び夏，殷，周の歴代帝王の時代全体を指している。

小楠は，この時代の帝王の言葉を集めた『書経』を重んじ，その中から特に民衆の豊かな生活と平和を実現する為政者の義務を引き出して，自らの政治理念とした。小楠が安政３年（1858年）越前藩士に宛てた手紙[60] の中には，日頃から『書経』に親しんで，堯舜

57）平野深淵『程易夜話』（国立国会図書館所蔵本）。
58）前掲『横井小楠　遺稿篇』，１－７頁。
59）同書，４頁。
60）同書，239-240頁。

のような古代中国の皇帝たちの「気象」を体得して現実の問題に対処することを勧めている。小楠が1850年代から60年代にかけて書いた政策論や書簡，漢詩の中には頻繁にこの「堯舜三代」に類似した言葉が現われている[61]。小楠は後にこの東洋的政治理念に基づいて西洋文明の衝撃を受け止めようとするが，それについては後述する。

『学校問答書』を差し出した後も，小楠と越前藩士との交流は続いた。安政５年(1858年)には小楠は越前藩校の教授として招かれ，藩士に対する教育や藩政改革に携わった。

1840年代に形成された小楠の修己治人の思想は50年代にも引き継がれ，越前藩と関わり，西洋文明を学ぶ中で，「修己」の側面が思想的に深められると共に，「治人」の具体策としての外交論や新しい富国論に結実していった。それは同時に後期水戸学に対する厳しい批判ともなるものであった。

次節では，50年代半ばにおいて小楠がどのように後期水戸学を批判し，攘夷論から脱却したかを見てみよう。

第２節　後期水戸学批判

ペリーが来航したとき小楠は攘夷を主張した。しかし，その２年後の安政２年(1855年)３月，幕府が徳川斉昭の一言でアメリカとの和議に傾いたという情報を得ると，斉昭に深く失望し，その政治行動を厳しく批難し始め，さらには斉昭を育んだ後期水戸学自体をも批判するようになった。

小楠は斉昭を次のように批難している[62]。すなわち，斉昭はアメリカと戦って勝てるかどうかという事の成否に囚われ，「義公（徳川光圀のこと―筆者注）以来の節義」を忘れ，和議を図った。節を通さず恥を忍んで和を結んだ国が中興することはありえない。斉昭には，一身の責任で事態を引き受ける意志がなく，事の成否を見る「利害之心」に陥り，陰で密かに智術を弄している。

小楠によれば，斉昭やその家臣に見られる政治的智術に傾く性向は，後期水戸学それ自体の「学術之曲」[63]に由来する。「学術之曲」とは，後期水戸学が「誠意の工夫」よりも「功利」すなわち富国強兵のための小手先の改革を重んじていることである。

小楠は，斉昭やその家臣に「誠意の工夫」すなわち「意を誠にする工夫」が成り立っていないことについて，彼らが自らを天下の先覚者と自負し，周囲からも崇められて意見する者もいないことから傲慢になり，己の心を他念なく物事つまり天下の経綸に一途にはま

61）同書，235，242，246，508，608，618，901，927頁。
62）同書，220-221頁。
63）同書，228-229，261頁。

っている誠の状態にすることができなくなっていると述べている[64]。

さて，安政２年（1865年）の夏小楠は，弟子の蘭方医内藤泰吉と一緒に，清末の官僚魏源が編集した万国地理書『海国図志』[65]（1843年刊）を集中的に読み，攘夷論から脱却した。

小楠は『海国図志』によって，欧米における科学，産業，交易の高度な発達を知って開国の不可避を悟り，積極的な開国と貿易による立国を説くようになっただけでなく，欧米の軍事力の背後に巨大な生産力の体系と民衆本位の政治，経済制度があることを知り，民衆に対する仁政の見地からすれば，むしろ欧米のほうが日本よりも優れているという見解すら持つに至っている。

こうして小楠は，後期水戸学の攘夷論と自民族中心主義から脱却した。安政４年（1857年）小楠は，越前藩士村田氏寿に対して「道は天下の道なり，我国の外国のと云事はない。道の有所は外夷と云へ共中国なり。無道に成らば，我国・支邦と云へ共即ち夷なり。初より中国と云，夷と云事ではない。国学者流の見識は大にくるいたり。終に支邦と我国とは愚な国に成たり。西洋には大に劣れり」[66]と語っている。引用文中の「国学者流の見識」には後期水戸学の自民族中心主義も含まれよう。

第３節　交易重視の国富論への転換

小楠は，万延元年（1860年）『国是三論』[67]を口述して，越前藩の改革に携わった経験や西洋学習に基づいて，越前藩政の大方針を藩士に示した。

『国是三論』は，富国論，強兵論，士道論の三篇よりなり，『書経』に描かれた，古代中国の理想政治（『国是三論』では「三代の治教」と呼ばれている）のイメージを通じて西洋文明を受容し，藩が主体となって生産力の上昇と交易による富国を目指す経済政策，海軍の創設，修己治人の工夫を行ったうえでの文武の鍛錬を提唱している。

小楠は，「三代の治教」の理念によって西洋文明の衝撃を受け止め，豊かで平和な民衆の生活を実現しようとした。民衆の力が強く，高度な文明が発展した古代中国の歴史を反映している『書経』の記述は，西洋文明を理解し受容する上で好適なイメージを提供したのである。

さて，『国是三論』中の富国論では，鎖国の弊害が指摘され，徳川家の安泰のみを図る幕府の「便利私営」[68]が批判され，藩による領内の殖産興業，藩あるいは藩が指名した商

64）同書，230頁。
65）前掲『横井小楠　遺稿篇』，224，243-245頁。前掲『横井小楠　伝記篇』，335頁。
66）村田氏寿『関西巡回記』，三秀舎，1940年，35頁。
67）前掲『横井小楠　遺稿篇』，29-56頁。
68）同書，39頁。

人による通商交易事業（外国との交易を含む）の推進が提案されている。小楠は，このようにして始めて民衆に職を与え，民衆の生活を豊かにすることができると言う。

『国是三論』でも開国は不可避とされ，積極的な通商交易事業が提案された。かつて水戸藩の改革に影響を受けて『時務策』で展開された節倹の策は放棄されている。

以上のように，小楠は1850年代，朋友講学と誠意の工夫に基づく修己治人の思想，修己治人の究極目的として民衆の豊かで平和な生活を掲げる「三代の治教」という政治理念に到達するとともに，西洋の経済政策や海軍制度を取り入れた新しい富国強兵論を提唱した。その過程で，小楠が後期水戸学から学んだ攘夷論や「抑商勧農」的な節倹策は捨てられていった。

1860年代（晩年の約10年間）においても，この枠組みに根本的な変化は見られない。文久２年（1862年）小楠は，幕府の政事総裁職就任の内命を受けた前越前藩主松平春嶽に江戸に呼び寄せられてブレーンとなり，越前藩政と関わる中で創案した経世論を幕政のレベルでも実現しようとしたが，参勤交代の緩和などでは成功したものの結局挫折した。

60年代で注目されるのは，小楠が水戸藩や長州藩における神道の害[69]に言及していることである。小楠は，そのことについて詳述していないが，水戸藩士が朝廷を重んじるあまり藩主慶篤や前藩主斉昭の制止を聞かず将軍に刃向って水戸藩を存亡の危機に陥らせたことを批判したのである。

また，小楠は，幕末の最終段階まで討幕運動に批判的で，尊王敬幕を唱えていた。但し，小楠は将軍が大政を天皇に返す大政奉還策には賛成した。小楠の「名分論」は，直上の主君に対する忠誠義務だけではなく，君臣それぞれの名に伴う義務の遂行を要求する点で，後期水戸学の「名分論」[70]とは異なるが，天皇-将軍-大名の秩序を重んじた点では後期水戸学と同じだった。このことには，小楠が，徳川家康恩顧の肥後細川藩の武士だったことも関係していよう。

結論　後期水戸学と小楠の政治思想

小楠が後期水戸学を構成する思想的要素のうち，どの要素を特に受容し，その後どのようにして後期水戸学を批判し，どの要素から脱却したかを考察した。その結果判明したことを最後にまとめて本稿を終えることにしたい。

69）前掲『横井小楠　遺稿篇』，902，910頁。

70）小楠の名分論については拙稿「研究ノート　松平慶永の小楠批判―君臣論を巡って」『横井小楠研究年報』第３・４号合併号，2007年６月参照。

まず明らかになったことは，小楠が1840年代前半（30代前半）当時進行中だった水戸藩の藩政改革の影響を強く受けて肥後藩でも藩政の改革運動を始めたこと，後期水戸学の勧農抑商的な富国論（節倹策）と攘夷論を受容したことである。

しかし小楠は，安政２年（1855年）斉昭がアメリカとの和議を唱えたという情報を聞いて，斉昭とその家臣に事態を一身の責任で引き受ける覚悟がなく，アメリカと戦って勝てるかどうかという目前の成果に囚われる「利害之私心」に陥っていると批難した。さらに小楠の批判は後期水戸学自体に向けられ，後期水戸学の「学術之曲」を，「修己」の出発点である「誠意の工夫」よりも「功利」すなわち富国強兵のための表面的な改革を重んじていることに見出している。

小楠は，同年中国で出版された世界地理書によって，強力な軍事力の背景にある西洋文明を学び，攘夷の不可を知り開国論に転じた。万延元年（1860年）には，『国是三論』を口述し，生産の奨励と通商交易によって民衆の富を増大させようとする新しい富国論を提唱した。

このようにして小楠は後期水戸学の攘夷論と富国論から脱却し，新しい富国論の立場に立って，各藩やその領民に重い負担を課している幕府の伝統的政治を「私営」の政と批判した。

前述したように，小楠が斉昭とその家臣や後期水戸学を厳しく批難し始めたのは，安政２年（1855年）である。しかし，1830年代末から40年代にかけての（小楠20代，30代）漢詩文や書簡の中には『大日本史』や水戸藩士を批判したものがある。

江戸遊学に向かう途中で詠まれた漢詩は，『大日本史』が，上皇に刃向かったという外形的事実にこだわって源義仲伝を「叛臣伝」に入れていることを批判している。また，1840年代に書かれたと推定されている『南朝史稿』は，『大日本史』の楠木正成伝に言及し，天皇に対する正成の忠誠心を十分に描いていないと批評している。

遊学中に詠まれた漢詩の中には，いたずらな悲憤慷慨は国家にとって害になると水戸藩士に忠告したと考えられるものがある。さらに，小楠は嘉永３年（1850年）以来東湖に書状を送り水戸藩内の「党争の禍」に対する憂慮の念を伝えている。

このように小楠は，『大日本史』の記述に飽き足りないものを感じ，水戸藩に対して厳しい目を持っていた。

小楠が後期水戸学から離反した時期について源了圓氏は，安政２年（1855年）としており，筆者もその説を採ってきた。しかし，天保10年（1839年）以来の漢詩文を見ると，小楠は50年代半ばまでは水戸藩に政治的な連帯感をもっていたが，その一方で水戸学と藩士のあり方に批判的な目をもっていたことが分かる。

このような観点から天保13年（1842年）の『時務策』を読むと，そこでは確かに水戸藩の士風の基礎を創った徳川光圀が賛美され，水戸藩が行った専売制の廃止や節倹政策などの影響が見られ，水戸藩や後期水戸学に対する批判は行われていない。しかし小楠は，孟子の民本主義の立場から民衆の富を増大させる政策を提案し，肥後藩の「貨殖の政」を「収斂の政」と断罪している。小楠は，当時の支配階級である武士の一員であったが，その頃より民衆の視線から現実の政治を見ることができるようになっていた[71]。

後期水戸学者も，貧民の生活を豊かにすることを説いてはいる。しかし，それは民衆のためというよりも，武士階級の生活を安定させて国防・治安の任務を果たさせ，国内の一揆を防止して幕藩体制を維持するためだった。

斉昭は外患とともに内憂として農民一揆や反乱を心配し，大坂で起きた大塩平八郎の乱に大きな関心を示している[72]。また，正志斎は，キリスト教が再び日本に入り民衆に広まることを深く恐れていた[73]。後期水戸学の富国強兵策は，欧米列強に対する国防であると同時に，民衆の反乱から幕藩体制を守る策でもあった[74]。

『時務策』を書いた当時の小楠が，このような後期水戸学の体質まで見抜いていたかどうかは分らないが，孟子の王道思想（仁政思想）に立つことですでにその潜在的な可能性を持っていたと言えよう。

小楠が孟子の王道思想を受け入れる素地となったのは，江戸前期の儒者・経世家の熊澤蕃山に若いころから私淑し，その著書『集義和書』に親しんでいたことである[75]。

池田光政に仕えて岡山藩政に携わった蕃山の『集義和書』は，江戸前期という時代に日本の風土の中で為政者たる武士がその社会的地位や精神的境地に応じて如何に生きるべきかを，儒教道徳の観点から説いたものである。

蕃山は『集義和書』の一節で，「民は惟(これ)れ邦の本なり」[76] という『書経』中の言葉を踏まえ，「国の本は民也。民の本は食也。民・食の事くはしくしらでは，国・郡を治る事あたはず」[77] と述べ，大君・諸侯が民衆の稼穡の事を知らないでは済まされないと述べている。

71）前掲野口宗親「横井小楠の『沼山閑居雑詩』について」の313-314頁を参照のこと。
72）徳川斉昭『戊戌封事』（『水府公献策』所収）
73）前掲会沢正志斎『新論』，94-95，102，104頁。
74）遠山茂樹『明治維新』，岩波書店（岩波現代文庫），2000年（初版は1951年），50-51頁。
75）蕃山が小楠に与えた影響については，前掲拙稿「横井小楠による水戸学批判と蕃山講読―誠意の工夫論を巡って―」，及び前掲野口宗親「横井小楠の『沼山閑居雑詩』について」313-314頁を参照のこと。
76）「民は惟れ邦の本なり」の出典は，小野沢精一訳注『書経』下，明治書院，1985年，382頁。
77）熊澤蕃山『集義和書』（『熊澤蕃山』日本思想大系30所収），岩波書店，1971年，344頁。

『集義和書』は，また，武士が自分の心を治める「心法」上の工夫の要として「誠意」を重んじている。小楠が1850年代修己治人の出発点として主張し，後期水戸学批判の根拠とした「誠意の工夫」論も，蕃山の影響に基づいていた。

『時務策』以来，小楠は為政者の重要性に気付き，越前藩士と交流し，越前藩政に関与する中で，朋友講学と誠意の工夫による修己治人論を確立するとともに，「治人」の目標を示す「三代の治教」の立場に立って西洋の経済政策を受容して交易を重視する新しい富国論を展開した。

小楠は最後まで儒教思想に立脚しつつ，ペリー来航後の変乱に対処しようとするうちに，為政者に対して，己を修めることから出発し，民衆の豊かで平和な生活を実現することを要求する倫理的な政治思想に到達した。その地点からは，後期水戸学の富国強兵策は功利のみを重んじる表面的な改革案に見えるようになったのである[78]。

無論，小楠も時代の子であり，後期水戸学が創り出した「想像の共同体」から完全に自由になったわけではない。小楠は国体論や尊王論を神道思想によって根拠づけたりはしなかったが，それをその時代の了解事項として議論を進めている。例えば，小楠は前越前藩主松平春嶽に対して，越前藩の藩是の第１条[79]として，朝廷を尊び幕府を敬うことを挙げている。

しかし，小楠は同時に尊王の行き過ぎも警戒している。小楠によれば，水戸藩における神道の害として，水戸藩士が朝廷を尊崇する余り族父である将軍に弓を引いたことが挙げられる。1860年代の小楠にとっては，内乱を防ぎ日本の独立を守ることが最も重要な課題だった。従って，内乱の導火線になりそうな水戸藩や長州藩の攘夷運動には手厳しかった。

小楠は，1850年代半ばに攘夷論から脱却した後は，「国学者流」の自民族中心主義や「和魂（やまとだましひ）」に基づく攘夷論[80]を批判した。その挺子となったのは，「堯舜三代の道統」という儒教的王道思想によって受容された，西洋における民衆本位の政治というイメージだったのである。

78）前掲『横井小楠　遺稿篇』，262頁。
79）同書，89，97頁。
80）同書，63頁。